中島飛行機（愛知県半田市）学徒動員六十周年記念 京三中三学年集会開催さる

三学年集会実行委員会

平成十七年六月十二日、山城高校に於いて開催された集会には、予想を超えて約八十名に達する出席があり、大盛会となりました。

戦後六十年を過ぎて、尚我々の心中に、学徒動員の記憶が、強く根付いている事を証明したと言えます。

一　来賓挨拶

冒頭に京三中・山城高同窓会会長江羅氏と、校長橋本氏の、祝辞を受けました。特に橋本氏からは「八十名というスケールの大きい、出席者の数に驚くと共に、先輩諸兄の母校に対する誇りと、相

互の絆の強さに感動を覚える」との挨拶があった。

Ⅱ　学徒動員体験に就いての各学年代表報告

①　三十八回生・・・過酷な生活条件との格闘・・・

最年少であった三十八回生にとって、半田の生活は、京都では想像もできなかった、過酷な生活との闘いに直面した。第一には飢えとの闘い、次いで寮に於ける「蚤」「虱」「南京虫」との日々戦争。往復八キロの道のりを、ハダシ同然で通勤した苦痛。生きる為の教師は、工員や徴用工の大人達であって、彼等からシタタカに生きるノウハウ、生活の知恵を必死に吸収した。戦後三回の半田訪問をはたしている。昭和五十年頃の第一回訪問の後、体験記録文集「精一杯生きていた」を刊行し、前述の生々しい生活体験を綴っている。

平成七年、半田主催の戦後五十周年記念平和式典（地震、空襲犠牲者の慰霊碑除幕式）には、有志十三名（三十七回生四名）が参加し、全国からの動員学徒を代表して、京三中が追悼の辞を奉読した。同年秋十月には、三回目の半田訪問（五十二名参加）をし、体験記録第二集「学徒動員五十年」を刊行、犠牲者の追悼を中心に置き、この教訓が後世に伝えられる事を念願している。

三十八回生は一方では、学徒動員の苦しい体験を乗り越えた事が、戦後の社会生活の荒波を、乗り越える糧となった事を強調した。（辻氏報告）

② 三十七回生……痛恨の十三人の学友の犠牲……

三十七回生の学徒動員の中心は、なんと言っても昭和十九年十二月七日の東南海地震で、中島飛行機山方工場が倒壊し、その下敷になって十三名の学友が犠牲となった事にある。

三十七回生同窓会は、この悲劇を忘れない為に、毎年地震の起こった十二月七日を中心に、開催日をきめ、「追悼法要」や、二百万円を超える醵金によって、母校山城高校校庭に、慰霊碑「紅燃碑」を建立し、末永く後世に史実を伝え残す事業を重ねてきた。

昭和四十六年に体験記録集「紅の血は燃ゆる」が刊行された。これは三十八回生の体験記録、「精一杯生きていた」の刊行を促進したのみならず、全国紙や地元半田の、「半田空襲と戦争を語る会」通信を通じて、中島飛行機に学徒動員された、全国の仲間に紹介されて、その後続々と刊行される記録文集の、

先駆けとなったと評価されて良い。

平成十六年七月三日、昭和四十五年十一月以来二回目の半田一泊旅行を行った。参加者四十名。旧工場跡（現輸送機工業）、新池寮跡、旧通勤路等を訪れた後、内海町の旅館で一泊。その夜の宴会では、半田の体験のない予科練出身者や、卒業後初めて同窓会に参加した友も交え、永年交流の続いた半田高女生の参加もあって、同じ釜の飯を食った強い絆と、連帯感を再認識した夜であった。（天野氏　報告）

③　三十六回生……学徒動員体験を後輩達に伝えよう……

中島飛行機山方工場で共同作業をしたという縁で、一部三十六回生有志と元高知師範女子部の方達と戦後交流があったが、学年全体としては、半田や動員関係の行事との関係は無かったに等しく、同窓会活動も弱かった。三十六回生は、四年終了時に約二割の上級学校進学者が抜け、半田へ行ったのは残り約八割であった。その上卒業間近とあって、進路選択を迫られていた。軍関係へ進む者は良いとして、一般上級学校進学希望者には、徴兵猶予特権が外されて、何時軍隊に召集されるか分からない、不安がつきまとっていた。（事実、年長者の中には、徴兵検査をうけさせられて、入隊した者もい

た）その上過酷な生活条件も重なって、三十六回生の学徒動員生活は辛く、重苦しく、荒んだ空気に支配されていた。

以上の様な複雑な事情があり、戦後の学年同窓会は、まとまりにくかったが、今回の三学年集会への参加呼びかけには、予想を超えて二十四名の参加申し込みがあり、又多くの返信が寄せられた。そこに書かれたメッセージを読むと、三十六回生の諸君の脳裏にも、半田の学徒動員体験の思い出が、深く刻まれている事がわかる。

＊東南海地震の被害、特に悲惨な犠牲者を思い出すと胸が痛む。（出席、欠席回答の双方に認められる）

＊四修で半田へ行かなかったが、犠牲者の話を聞いて、痛ましい重いにさいなまれる。

＊最近半田へ行った。乙川にあった工場を訪ね、雁宿公園の慰霊碑も参ってきた。万感胸に迫る思いであった。……（以上一部紹介）

本日ここに集まった二十三名は、三十六回生を代表して「紅燃碑」に献花追悼し、三十七回生、三十八回生の諸君と共に、学徒動員体験を風化させる事なく、後輩に伝えたいと思う。（高橋氏）

Ⅲ　紅燃碑・献花式

報告会終了後、三十七回生一色氏の案内で「紅燃碑」に献花し、十三名の犠牲者を追悼した。三十六回生、三十八回生がこれだけまとまって訪れたのは、初めての事で意義深い。

又現在の仮設置場所から移転される永久設置場所が、新体育館に対面する校長室前と紹介され、設計図も提示された事は、喜ばしい事であった。

Ⅳ　懇親会

花園会館に移動して、午後一時より懇親会が開催された。半田以来の旧交を温め、親しい懇談と思い出を語り合う中で、動員体験の掘り起こしも期待する。という目的は良好な雰囲気の中で、達成されたのではなかろうか。

＊三十六回生の岡田氏が、三十八回生の席を訪ね話がはずんだ。その他三十六回生、三十八回生間には、八組の兄弟関係の存在が判明し、親近感が増した。

＊三十六回生の中川氏は、柔道部の猛者として有名であるが、

当日半田から入手した資料「半田空襲と戦争」誌九号に、氏に就いての記述を発見し、本人に提示した所、動員中半田で行われた柔道大会を通じて山梨日川中の土屋嘉男氏（現映画俳優）と親交のあった事が思い出され、六十年振りの文通が交わされたというエピソードもある。

＊会場に「半田市誌別巻」「半田高女校誌」「ばれいしょの青春」（豊橋松操高女）「夏雲の彼方」（高知師範）「山梨学徒勤労動員の記録」（山梨甲府高女）「〝都の乾　安居の野に〟……学徒動員の記録」（福井商業）「白砂青松の追憶…波乱の敦商時代」（福井敦賀商業）等々の書籍、資料が展示された。

これらは戦後も続いた、〝三十六回生～高知師範〟〝三十七回生～半田高女〟〝三十八回生～高知師範、豊橋松操高女、山梨甲府高女〟〝三十七回生～福井商、敦賀商〟との交流の結果得られたものである。学徒動員体験の視野が大きく拡がった。

戦後六十年振りの意義ある集会にしては、企画が貧弱であったという批判を受けた。発起人会――実行委ができたが、運営の細目の意思統一が不

十分であった。代表報告を補完する出席者の自由発言を、懇親会で組織する配慮が足らなかった。半田訪問や、イベントに関する資料、記念写真等を、三十七、三十八回生は豊富に所持しているのだから、会場で展示紹介するべきであった。書籍や資料閲覧出来る様、展示する工夫も必要であった。

① 而しこの三学年集会は、欠点をはるかに上回る成果が、あったとみるべきである。三十七回生を除いて「紅燃碑」を知る者は少なかった。それが今回五十数名の三十六、三十八回生が、まとまって献花した事は、特筆すべき事である。今後各人の口コミや、学年同窓会を通じて三学年全体のものとなるだろう。

② 「紅燃碑」移転先永久設置場所が新体育館に対面する校長室前にきまった事。

③ 京三中・山城高百年記念誌に、三十七回天野氏、三宅氏、宮田氏、二宮氏、一色氏、三十八回生辻氏、折井氏、小針氏、吉積氏、高林氏、山下氏が投稿し、半田の学徒動員体験が歴史に記録される事になった事。

④ 百年記念事業実行委員会の、募金呼び掛けに応じた三学年の合計は、京三中全体の合計に対して人数に於いて六十％を超え、金額に於いて五十％に迫る数字を示しており、文字通り

百年事業推進の中心的役割を果たしつつある事。

⑤　三十六、三十七、三十八回生の出版物、及び半田市、他府県動員学徒との交流に依って、入手した資料等を後世に伝える為、保管場所（候補にあがっているのは山城高校、立命館大学平和ミュージアム、京都府、奈良県立図書館等）を確保する為、交渉を始める事が決められた事。

以上

三学年集会実行委員会

三十六回生　高橋　玲爾、西村　山治
　　森本　皓昭、谷口　敬治
三十七回生　一色　逸雄、天野　光三
　　関矢　昭、三宅　仁
三十八回生　辻　宏、高林　藤樹
　　三中西利雄、佐々木　峻